

関東軍軍人のソ連軍による捕虜化： 旧ソ連国防省公文書が語るもの

ソ連第一極東方面軍のケーススタディ

ヤコブ・ジンベルグ

序論

1945年8月から9月にかけての旧ソ連軍による対日軍事行動の際の、ソ連軍による日本軍人の捕虜拘束問題¹⁾は、現在もなお切実な問題として存在し、十分に解明されないままになっている。特に、この歴史的事実の解釈をめぐるっては、60万人を超える日本軍人をいかなる目的で捕虜としたかが、依然として明確ではない。²⁾

捕虜問題について明確な論拠に基づく解釈が不足している理由は、第一次資料。とりわけ作戦に関する情報を含むロシア語第一次資料の閲覧が、難しいことにある。ソ連崩壊後、閲覧や資料入手の環境は著しく改善されたが、さらに広汎な資料を閲覧し、その内容を広く公開していく作業には、まだ少なからぬ時間が必要である。

ソ連指導部が第二次大戦の結果に関する統計数字に公けに真剣な関心を示したのは、ソ連崩壊のわずか2年前であるが、これはゴルバチョフ大統領による「情報公開」政策がもたらした結果であった。1988年12月ソ連国防省は、ソ連共産党中央委員会宛に『1941-45年大祖国防衛戦争におけるソ連軍兵員の損失について』³⁾と題する報告書を送った。最終的な決定がないままに、1989年3月ソ連共産党中央委員会は、ソ連国家統計委員会の管轄下にガレーエフ將軍を長とする研究グループを設置し、問題の研究にあたるよう指示した。

作業には、ソ連科学アカデミー、国防省、ソ連閣僚会議付属公文書総局などから専門家が集められた。調査の結果、ソ連の第二次大戦における人的損失は、2700万人、この内軍人は870万人であることが判明し、1990年5月ゴルバチョフ大統領は、この数字を公表した。調査委員会はソ連の人的損失に関する詳細な結論を作成しただけではない、これらの資料を秘密扱いからはずし、公開するように提案したのである⁴⁾。しかし、こうした文書の閲覧は、短期間ではなかなか十分な結果は得られないものである。

さて、委員会のメンバーで退役軍人のグルキン元少将によると、委員会の資料では、大祖国防衛戦が開始された1941年6月から終戦の1945年5月までに、行方不明及び捕虜となった軍人は455万9000人、このうち111万500人の消息はいまだ不明のままであるという。委員会の分析では、このうちのおよそ61万人が捕虜となり本国帰

還を果たさず、50万人以上が戦死したといわれる。この数字からグルキン少将が出した結論は、「およそ400万人のソ連軍人がドイツの捕虜となっていた」というものである。捕虜の正確な数を確定する作業を、今後も継続する必要があることはいうまでもない⁵⁾。

ソ連崩壊は全体として、1945年の日本軍人捕虜化の研究にとっては、きわめて良い影響をもたらした⁶⁾。なかでもソ連時代の原資料を閲覧する道が広くひらかれたことによるプラスは大きい。また、この問題に限ってみても、ソ連崩壊後の日関係は著しい進展を見せたが、そのクライマックスとなったのは、エリツィン前ロシア大統領が1993年日本を訪問した際、スターリン時代日本人捕虜に対する非人道的処遇に対し、日本国民に公式謝罪を行なったことである。これが更に、その後の研究活動（日ロの共同研究も含め）にとっての良好な環境作りを促すことになった。

なかでも充実した共同研究の好例となったのが、1992年から開始され、両国のジャーナリストや作家、社会活動家が参加して定期的に開催されている、日本兵のシベリア抑留問題に関する日ロシンポジウムである⁷⁾。一方で1990年代に拡大されたソ連側資料閲覧公開により、特にロシアにおいて、日本兵捕虜問題の革新的な研究がつぎつぎに発表された⁸⁾。こうした動きは、日本の専門家たちは好意的な反応を示した⁹⁾。

とはいえ、日本兵捕虜化問題の研究は、いまだ緒についたばかりであり、今後の精力的な研究が求められるところである。ロシアの日本研究家エレナ・カタソノワは、「日本・満州軍軍人のソ連領への移送は行なわない」とした1945年8月16日付け国防人民委員部と内務人民委員部の共同指令を発した後に、スターリンを長とする最高総司令部決定1945年8月23日付第9898ss号が、「およそ50万人の日本軍人」¹⁰⁾のソ連での強制労働に関する指示を出すという方向転換を行なったのか、この根本的問題が解明されていないと指摘しているが、まさにその通りである。それだけではない、8月23日付のこの決定がソ連極東方面軍後方担当副司令官の手に届いたのが9月2日と遅れたのはなぜか、この点もまだ解明されていない¹¹⁾。

ロシアの研究家O.バザーロフは、内務省、連邦保安局、国防省、特別アーカイブの資料は、まだ研究者に公開されていないものが多い一方、公開されているものも、データの数字や状況評価にしばしば食い違いがあると指摘している¹²⁾。立場の違いは、ロシア側研究者の見解にも見られる。たとえば、ソ連内務人民委員部・内務省捕虜・抑留者局資料の研究者であるイリーナ・ベスバロドワは、他の研究者について、S.クズネツォフは「地方の資料のみ依存している」、V.P.ガリーツキーは、「あまりにもソ連の公式データに依存しすぎる」と批判している¹³⁾。

それ以外にも、日本軍事捕虜の正確な数や構成といった基本的な問題も、事実上解明されないままになっている。日本の政治家土井たか子は1988年5月5日モスクワ大学における講演で60万人という数字を引いているのに対して、ガリツキーは63万9635人、ベズバロードワは、60万から64万人の間との見解を示している¹⁴⁾。

本稿の目的は、1945年8月9日から9月14日までの期間に、ソ連軍が満州への進攻の際に行なった日本軍人に対する捕虜拘束の実態を、主に、第一極東方面軍本部が極東ソ連軍最高総司令部に対して行なった戦況報告（旧ソ連国防省公文書館所蔵）に含まれる資料に基づいて跡づけることにある¹⁵⁾。

また本稿の直接の目的は、第一に、捕虜化が進行した時系列で日本人軍事捕虜の人数及び民族構成を資料データにのみ基づいて示すこと、第二に、捕虜に含まれる将官の人数及び身元を出来る限り、これも時系列的に示すことにある。

捕虜の民族構成をなぜ明確にするのかという点については、ソ連側資料では、軍事捕虜について、中国人、満州人、モンゴル人などの満州国軍人がいたにもかかわらず、すべて関東軍軍人として記録されているとの、O.バザーロフの言葉を引いておきたい。なかでも、モンゴルの将校を養成する軍学校校長ウルジン・ガルマエフの名をあげておきたい¹⁶⁾。

捕虜に含まれる将官を明確にする目的については、関東軍将官が捕虜になった時の状況がまだ十分に研究されていないという事情がある¹⁷⁾。また、関東軍将官捕虜191人の構成も明確でなく、先ほど挙げたウルジン・ガルマエフや将官の肩書きを持つ南満州鉄道の職員も、この191人の中に誤って含まれるということも起こっている¹⁸⁾。

著者がソ連第一極東方面軍を本稿の検討の対象として選んだのは、この軍が満州領長春地区に進攻する過程で、関東軍部隊が蒙ったふたつの大きな打撃のうちの一つを、同軍に与えたからである¹⁹⁾。第一極東方面軍による日本軍人の捕虜拘束問題を検討する直接のきっかけとなったのは、当時ソ連の第一極東方面軍司令官であったキリル・メレツコフ元帥の回想録中に、1945年9月10日までに第一極東方面軍は30万人の日本軍人を捕虜としたとの記述を発見したことである。周知のように、これは、ソ連軍の捕虜となった日本軍人の総数として一般に考えられている数字のほぼ半数に当る²⁰⁾。

ソ連軍進攻への準備

1943年『ソ連邦元帥』の称号を得たアレクサンドル・ワシレフスキーは、同年秋、日本との戦争に必要な兵力及び物的資源を算定せよとの指示を受けた。1945年元帥

の指揮のもと、満州進攻の戦略計画が策定され、最高総司令部及び国家防衛委員会により承認された。1945年7月、ワシレフスキーは極東ソ連軍総司令官に任命され、すでに同年9月8日には、巧みな作戦指揮に対して二度目の『金星メダル』を授与されている²¹⁾。

最高総司令官I.V.スターリン、アレクセーエフ大將及び総司令部メンバーであったアントーノフ最高総司令部付属赤軍参謀長の署名が入った最高総司令部の3つの文書が、1945年6月28日付で、沿海地方部隊、ザバイカル及び極東各方面軍の司令官に送られた。極東方面軍部隊の任務は、「ザバイカル方面軍及び沿海地方部隊の関東軍壊滅を積極的支援とハルピン地区占領」²²⁾であった。一方ザバイカル方面軍部隊の任務は、「満州中央部への急進撃、沿海地方部隊及び極東方面軍部隊との合同による関東軍の壊滅ならびに赤峰、奉天（瀋陽）、長春、小二溝の占領」²³⁾にあった。さらに沿海地方部隊の任務は、「満州中央部への進攻及び、ザバイカル、極東各方面軍部隊との合同による関東軍壊滅ならびにハルピン、長春、清津の占領」²⁴⁾である。

沿海地方軍（後に第一極東方面軍に改称）司令官キリル・メレツコフソ連邦元帥の回想では、沿海地方部隊司令官であったメリツコフ元帥の侵攻作戦のあいだに、1945年の5月から6月までの期間だけでソ連極東ならびにザバイカル地区には、ソ連西部から13万6千個の車両が兵員及び貨物を積んで到着し、「対日戦争開始」までには、すでに配備されていた兵力を含め、150万人を超える兵力と戦車・自走砲5500台、さらに3800機以上の戦闘機がこの地に集結していた²⁵⁾。

1945年6月28日付の指令文書は、侵攻作戦の策定がいかに周到かつ広汎なものであったかを示している。たとえば、極東方面軍第16軍最大の任務は、「サハリン島」のゆるぎない防衛であり、「島領内への日本軍侵入及び日本軍降下部隊のサハリン島沿岸上陸」²⁶⁾の阻止にあった。沿海地方部隊に対しては、「主力部隊の左翼を援護し、その後敵の予備軍による羅南、清津、羅津など朝鮮北部の港への接近を阻止するため、第5軍左翼及び第25軍右翼に対する敵の防衛線への兵力の一部割り当てと、バラバシ、クラスキノ、スラヴァンカ地区の第25軍の一部兵力による琿春（フンチュン）、安図方面への援護攻撃実施を検討し、羅南、清津、羅津など朝鮮北部の港占領をめざすべし」²⁷⁾との指令が出された。

ザバイカル方面軍部隊は、「起動旅団二個及び戦線第59騎兵師団により強化されたモンゴル人民革命軍兵力で」援護攻撃を行なうべしとの指令を受けた。その際モンゴル人民革命軍の進攻は、戦線の主力部隊による進攻開始よりも2、3日遅くてもよいとされた²⁸⁾。

三つの指令文書は、準備されるいずれの作戦についても、極秘とする旨を明記していた。とりわけ、いずれの作戦策定についても、作戦全体に関わるのは、司令官、軍評議員、参謀長及び参謀本部作戦部長の4人に限られるとされた。各兵科機関の長は、作戦計画の個々の部分策定にのみ関わり、全体的な任務は知らされなかった。各軍司令官に対しては、「各人に口頭で任務を与え、書面による指令は行なわない」よう指示された。

三つの指令文書では、部隊の行動計画に関する文書はすべて部隊司令官及び軍司令官個人の保管庫に保管することが義務付けられた。作戦計画に関わる文書のやりとりや会談は「赤軍参謀本部長をじかに通してのみ行なう」²⁹⁾とされた。

また、秘密文書のやりとりや侵攻作戦の過程で、大物軍司令官の名前、苗字、軍の階級については、わざわざ偽名などを使うこともしばしば行なわれた。メレツコフの回想によれば、この方法は、敵の情報をかく乱するために活用されたという。たとえば、メレツコフ元帥は「マクシーモフ大将」、ザバイカル方面軍のマリノフスキー司令官は「モロゾフ大将」ワシレフスキー元帥は「ワシーリエフ大将」³⁰⁾という風に。

この三つの文書に特徴的なのは、日本軍人を捕虜として拘束する問題について、一切記述がないことである。1945年8月2日付極東ソ連軍総司令官に宛てた最高総司令部の指令（スターリン及びアントーノフの署名入り）では、8月5日以降沿海地方部隊は第一極東方面軍に、極東方面軍は第二極東方面軍に、また「ワシーリエフ大将」の機動部隊（ワシレフスキー元帥）は極東ソ連軍総司令部に改名され、イワノフ大将は極東ソ連軍総司令官参謀長に任命されているが、この文書にも捕虜の問題は触れられていない³¹⁾。

1945年8月7日には、計画に対する何回目かの変更が行なわれた。この日の16時30分モスクワから「ワシレフスキー極東ソ連軍総司令官」宛てに「親展」のスタンプが押された最高総司令部の命令書が発送された。スターリンとアントーノフの署名が入ったこの命令書は、ザバイカル、第一極東、第二極東の各方面軍に対し、8月9日日本に対する軍事行動を開始せよと指示するものであった。また命令の写しが、ザバイカル、第一極東、第二極東方面軍の部隊司令官、太平洋艦隊司令官宛てに發送された³²⁾。

特に命令書では、「8月9日午前すべての戦線の空軍は軍事行動に入り、まずハルピン及び長春を爆撃」せよと指示していた。さらに「ザバイカル及び第一極東方面軍は、8月9日午前」、第二極東方面軍は「ワシレフスキー元帥の指示を受け」満州国境を越えよ、そして太平洋艦隊は「第一戦闘態勢に移行」し、「潜水艦を展開、

艦隊の軍事行動は8月9日午前より開始」せよとの指令が行なわれていた³³⁾。

ザバイカル地方時間22時35分、ワシレフスキーは「最高総司令部の追加指令」として、まず、第一極東方面軍司令官に対し、「ハバロフスク時間45年8月9日1時に予定された計画の遂行を、ハバロフスク時間45年8月9日1時に開始せよ」との命令を送る。司令官に対しては特に、進攻の準備作業はすべて、「45年8月8日未明及び45年8月8日中に完了」し、「遅くとも45年8月9日夜明けまでに」「戦線の全航空隊を」動員せよとの指示が行なわれた³⁴⁾。

22時40分、ユマシェフ太平洋艦隊司令官宛てワシレフスキーの指令が発せられる。それによると、「陸空海ともに軍事行動の開始」は、「ハバロフスク時間45年8月9日午前1時」とされた³⁵⁾。

23時ワシレフスキーは、ザバイカル方面軍司令官に「先頭部隊の軍事行動開始時間は、先に予定されたモスクワ時間45年8月10日18時00分から、ザバイカル地方時間45年8月8日24時00分に変更する」との指令を送る。司令官に対しては特に、「45年8月9日午前より、極東方面軍の全航空隊を、計画で指示された本戦線に対する課題の遂行に向け、軍事行動に投入する」³⁶⁾との指示が行なわれた。

23時10分、プルカエフ第二極東方面軍司令官に対し、軍事行動開始時間をハバロフスク時間「45年8月9日1時」に変更するとの指令が送られる。特に司令官に対しては、「45年8月9日午前より、計画に指示された任務遂行のため、戦線の全航空隊の行動を開始」せしめよとの指令が発せられた。任務の内容については、この指令では「第二極東方面軍部隊の任務はこれまで通りであり、主要任務は、戦線地帯における鉄道の遅滞なき運行を保障することである」³⁷⁾となっている。

以上引用してきた文書にも、日本軍人を捕虜とすることについて、いかなる発言も指令も含まれていない。また第一極東方面軍軍事評議員及びメレツコフ同戦線部隊司令官から戦線の軍人に宛てた、45年8月9日付の『わが祖国ソ連のために』と題されたアピール文にも、そうした内容は含まれていない³⁸⁾。この「アピール」は、「これを正当なる任務、聖なる任務と心得、日本侵略者を容赦なく撃滅せよ」と呼びかけ、以下の文章で締めくくられている。

「背信的敵には雄雄しく、勇気と怒りを以って戦え。

赤軍兵士の名を讃えよ、不滅のわが祖国ソ連の力を讃えよ、われらの偉大な最高総司令官スターリン同志の名を讃えよ！

その聡明にして天才的な指揮のもと、われらは常に勝ちを収めてきた、これからも！

勝利に向かって前進せよ！
日本侵略者に死を！」³⁹⁾

この種の激しいレトリックは、「アピール」に盛り込まれたいくつかの論拠がもたらした結果である。1945年8月8日駐ソ日本大使に手渡された日本政府宛てソ連政府の開戦声明に比べると、この「アピール」は、開戦声明を全文引用した上で、「戦争終結を早め、犠牲者の数を少なくし、全体的な平和が一刻も早く回復する」ことが必要だとして、ソ連の対日参戦を正当付けようとしているが、それだけではない。

このアピールは大使の声明とは異なり、1918年から1922年にかけ日本がソ連極東の大半を占領したのは「強盗日本の軍閥」による反ソ連軍事行動であるとして、「旅順、ハサン、ノモンハンで流された英雄たちの血、干渉の時代にソ連人に対し日本侵略者が行なった蛮行に対し、日本の侵略者を罰する」⁴⁰⁾ よう呼びかけている。アピールはまた、「日本の侵略者は中立を装いながら、……ヒトラーの強盗政府とわが国の分割について秘密協定を締結し」、「ソ連に背面から攻撃を」しかけようとしたと主張して、第一極東方面軍の兵士たちに、「自国極東国境の安全を確保し」、「日本侵略者のわがソ連領土侵害」に終止符を打つよう訴えていた⁴¹⁾。

第一極東方面軍による積極的戦闘の過程で行なわれた関東軍軍人の捕虜拘束：

1945年8月9日-19日

第一極東方面軍による日本軍人の捕虜拘束に関する最初の記述は、1945年8月9日、すなわち侵攻作戦の第一日目にある。8月9日付ワシリエフスキー元帥宛ての戦況総括報告（第一極東方面軍司令官メレツコフ元帥、第一極東方面軍軍事評議員クルチコフ大将の署名入り）によれば、第一極東方面軍部隊は、フトウ（原資料では Хытоу）からハサン湖方面で敵の領内まで10キロの地点に進入し、「敵の将兵2322人を殲滅し、将校を含む58人を捕虜とした」。この日の第一極東方面軍の損失は、死亡153人、負傷1020人であった⁴²⁾。

その後8月19日までの第一極東方面軍の戦況報告では、8月17日及び18日に日本軍人の捕虜拘束に関する記述が初めて現われる。まさしく8月17日夜遅く、正確にはモスクワ時間23時30分に、最高総司令部は、スターリン及びアントーノフの署名入り命令書を、極東ソ連軍総司令官、第一極東、第二極東及びザバイカル方面軍司令官、太平洋艦隊司令官に対し、「日本軍部隊が武器を捨て、投降して捕虜となっている戦線地区では戦闘を停止する。捕虜は丁重に扱うこと」を指示した。命令は

「連隊長まで通達する」ことが義務付けられた⁴³⁾。

8月16日の昭和天皇が発した即時停戦命令を別にすれば、この命令が出されるきっかけのひとつと考えられるのが、メレツコフがモスクワに送った通知である。メレツコフはこのなかで、「8月17日山田乙三関東軍総司令官がソ連軍司令部に対し戦闘中止を提案するとともに、部隊に戦闘の即時中止を命じたと伝えた」と報告している。しかしその一方でメレツコフは、「実際には、日本軍部隊は抵抗をつづけた」と伝えている。メレツコフは回想録のなかで、「他の戦線でも同様の状況であった」ので、ワシレフスキー元帥は「日本側に8月20日午後12時までに武器を捨て投降し捕虜となることを要求し」、その際「日本軍部隊が武装解除をはじめれば、ソ連軍はただちに戦闘を中止する」と約束したと書いている⁴⁴⁾。

8月18日に至るまで、第一極東方面軍の戦況報告に日本軍人の捕虜拘束に関する記述が長い間行なわれなかった理由として、ソ連軍の急進撃に日本軍部隊が執拗な抵抗をつづけたためであることが推測される。これは注目に値する。メレツコフ元帥は、日本軍が「激しい戦闘を展開し、ただひとつの拠点も、ただひとつの高地も戦闘抜きでは明けわたさなかった」³⁶⁾と回想している。元帥はまた、日本兵が、投降せよとの日本人将校の命令を拒否し、みずからの手で将校を殺害したとも回想している⁴⁵⁾。

これもメレツコフの回想であるが、関東軍は撤退の際、みずから「人間地雷」としてソ連戦車に突っ込むという「特攻隊」の手法を「広く用いた」といわれる⁴⁶⁾。

そして最後にもうひとつ、関東軍が戦闘において、かなりの兵力を失ったことも指摘しておかねばならない。メレツコフによれば、日本軍の兵力が集中していた牡丹江（ムータンチアン）付近の戦闘では、「敵はおよそ4万人の兵力を失った」⁴⁷⁾。1945年8月17日3：00分までに行なわれた第一極東方面軍本部の戦況報告第8号によると、1945年8月16日の一日で、第一極東方面軍軍部隊は、第一及び第五軍による北東と北からの共同攻撃により、牡丹江付近で敵の主力部隊を殲滅した⁴⁸⁾。翌8月17日、山田大将は、戦闘中止を提案、日本海に面した朝鮮沿岸の、雄基、羅津、清津などの港はいずれも、「第一極東方面軍及び太平洋艦隊部隊に占領された」とメレツコフは書いている⁴⁹⁾。

ここで8月17日に話を戻そう。自発的投降が行なわれた地区では捕虜を丁重に扱い、戦闘を中止せよとの総最高司令部命令がモスクワから第一極東方面軍に届いたのは、時差を考慮するとこの8月17日と思われるが、8月19日3：00分第一極東方面軍本部戦況報告第010号によれば、すでに「45年8月18日には、第一極東方面軍部隊は、西に撤退する敵の部隊を追跡、関東軍部隊の武装解除と捕虜拘束に向け準備を

行なっていた」⁵⁰⁾。関東軍の降伏条件の遂行状況を監督するため、軍事評議会の全権代表としてシェシアホフ少将と将校のグループが、8月18日ハルピン市に飛行機で派遣された⁵¹⁾。

戦況報告第010号によれば、8月17日、18日の二日間に、ボリ（原資料では Боли）付近で第一極東方面軍第35軍は、「満州第一歩兵師団を司令官ともども武装解除し、捕虜とした」。「2004人の将兵が捕虜となり、戦利品を獲得した」⁵²⁾

同じく8月18日第一極東方面軍第25軍は、後退する敵の歩兵師団4個と連隊3個の追跡を継続、日本軍第3及び第5軍の武装解除と捕虜拘束に着手した」⁵³⁾。『日本軍第5軍降伏に関する45年8月19日15：00分の報告』によれば、「日本軍司令部が」戦闘中止命令を「出した」のは、8月18日午前10時のことであった⁵⁴⁾。また、第124、126、135歩兵師団から成る第5軍司令部はヘイダオヘツァ（原資料では Хэйдаохэцзя）にあり、「椎名中将、コミゾ中将、人見中将」ら師団司令官が指揮をとっていたと、報告されている。「第5軍司令官は清水規矩中将」、「軍本部長」は「川越少将」であった。「極東方面軍司令官は掖河付近において、日本軍将兵2万人を武装解除した」⁵⁵⁾とあるほかは、捕虜の具体的な総数は書かれていなかった。

翌8月19日メレツコフ元帥は「スターリンソ連邦大元帥」に「直通電話」で連絡をとり、ハバロフスク時間午前9時30分ハルピンから「関東軍の秦総参謀長、宮川ハルピン総領事が軍事施設団メンバーとともに飛行機で」出発した。またメレツコフは現場から以下のような報告を行なっている。「45年8月19日15：00分（ハバロフスク時間）、秦総参謀長はソ連極東方面軍総司令官及び私の出迎えを受けた」⁵⁶⁾。

長年の月日を経た後メレツコフは、秦総参謀長がまわりを「暗い目で」見回しといたと回想する。「シャツの襟は、息苦しいといわんばかりに、ボタンをはずしていた。眉は時折、無意識にぴくぴく痙攣した。皮膚のたるんだ顔には疲労がにじんでいた」。さらにメレツコフは、関東軍司令部の降伏命令が速やかに軍人に伝えられなかったのは、「ソ連進攻の一日目に兵团との通信が切断され、日本軍がたちまち指揮を失い」、飛行機を使って告知したとの、秦の説明を回想している⁵⁷⁾。

メレツコフによると、8月19日の会見の際「秦は、」「捕虜集合地点やそこへの移動ルート、時刻」を含む「ソ連軍司令部のあらゆる指示に同意を示した」。ワシレフスキー元帥は秦参謀長を通して、山田関東軍総司令官に対し、遅くとも8月20日午後12時までにすべての地点においてあらゆる戦闘行為を停止し、また軍部隊のいかなる再編成も中止するよう求める最後通告を伝えた。関東軍のすべての兵团及び部隊の完全な一覧が、8月22日朝までに極東ソ連軍総司令部に引き渡されることになっていたほか、降伏条件の遂行に係るあらゆる必要な措置は、関東軍司令部及び関

東軍所属の各軍本部を通じて実施するよう指示が出された⁵⁸⁾。

「降伏時及びその後の時期における軍の給食ならびに衛生状態に係る責任は」関東軍司令部が負っていた。なかでも、日本軍司令部は「関東軍食糧備蓄」を以て自軍の軍人を養うべしとされた。ワシレフスキーはあくまで規律ある降伏にこだわりながらも、「赤軍は高官クラスの将校や兵隊を厚遇する」と秦に「保障した」⁵⁹⁾。

8月20日付第一極東方面軍戦況報告を見ると、8月19日「戦闘行為は停止され、降伏した関東軍部隊は武器を捨て、大量に捕虜となった」ことが分かる。⁶⁰⁾ 日本軍人の武装解除と捕虜拘束は、第一極東方面軍が「ハルピン及び吉林方面」に向かって満州領内の奥深く進入する過程で、8月19日の終日つづいた。しかもこの戦況報告によれば、「いくつかの地区では、投降を拒否した敵の小規模グループと短時間の戦闘が行なわれた」という⁶¹⁾。

8月19日一日だけで、第一極東方面軍は、「5人の将官を含む」5万5千人の日本軍人を武装解除し、捕虜とした。これに対して、8月9日の侵攻作戦開始から19日以前までの期間に「捕虜となった」関東軍の「将兵は」わずかに「7千人」であった⁶²⁾。

第一極東方面軍部隊による日本軍人の大量捕虜化

1945年8月19日-9月5日

1945年8月19日終了までに捕虜となった日本軍人は、全部で6万2000人であった。それ以降9月5日が終わるまでに、およそ20万人をさらに捕虜とすることが出来た。手元にある書類によって、毎日の捕虜獲得のプロセスを跡づけることが出来る。

大量武装解除・捕虜拘束の開始は、次の記述が示すとおりである。すなわち、8月19日13時頃、ソ連軍の「カバリエフ大将以下が新京飛行場に到着した。進駐ソ軍は、早速通信連絡の遮断と交通の制限を断行し、且つ、在新京部隊に対し、新京東南側地区に集結を命じ、夕方より、その武装解除を開始した」⁶³⁾。

進攻作戦の開始から1945年8月19日終わりまでに、第一極東方面軍が捕虜とした日本軍人の数は6万2000人であった⁶⁴⁾。その後同年9月5日（を含む）までに、第一極東方面軍は更におよそ20万人の日本軍人を捕虜とした。

8月20日、21日、22日の3日間、第一極東方面軍は、ハルピン及び吉林に向かって進軍し、途上で敵の投降部隊を武装解除していった。8月20日のうちに、第一極東方面軍は6049名の日本軍人を捕虜とした。航空隊は戦闘には参加しなかったが、ワンチン、イェンチーなどの地区では、「破壊工作グループを殲滅する戦闘」が進行していた⁶⁵⁾。8月21日の終わりまでに、第一極東方面軍第25軍は、将官9人を含む敵の将兵2万9506人を捕虜とした。このなかには、「第三軍司令官村上啓作中将、第三

軍参謀長イケタニ少将]、「古賀、太田、ミザハラ」の各中将がいた⁶⁶⁾。

8月22日の終わりまでに、第一極東方面軍第25軍が捕虜とした者の数は、3万8800人に達した。また第一極東方面軍全体では、8月22日に捕虜となったものの人数は5万4000人で、このなかには「満州人1642人」も含まれていた。8月22日に捕虜となった軍人のうち、少なくとも4万808人は、関東軍ハルビン守備隊に所属する者で、第一極東方面軍第一赤旗軍により武装解除された⁶⁷⁾。このなかには、「兵卒3万5000人、下士官4000人、将校1800人、将官8人」が含まれていた。拘束された将官の中には、「満州第四軍管区司令官リ・ヴィン・ルン中将、第四軍司令官上村幹男中将]、「大野武城、青木ケン、中村リュウイチ」⁶⁸⁾らが含まれていた。

8月23日及び24日第一極東方面軍は、引き続き「新たな地区への集中」と敵軍人の捕虜拘束を行ない、8月25日には、「更にもう1個の軍団により、朝鮮奥地への進軍を継続した」⁶⁹⁾。8月23日の一日で、「朝鮮人兵士100人」を含む1万1147人が捕虜となった。しかも8月22日と23日の二日間で「破壊工作員12人が殲滅され、21人が捕虜となった」ほか、虎林（フーリン）市及び密山（ミーシャン）市の住民から「ライフル銃918挺、機関銃24挺を押収した」⁷⁰⁾。

8月24日第一極東方面軍は、中国人1500人を含む1万6801人を捕虜とし、また戦況報告によれば、「45年8月24日が明けるまでに、方面軍部隊により」全部で「敵の将兵及び将官15万9543人が捕虜となった」。⁷¹⁾ 8月25日一日で敵の軍人1万8302人が、また戦況報告によれば、8月25日が明けるまでに、総数で17万7895人が捕虜となった⁷²⁾。

8月26日第一極東方面軍はさらに日本軍人に対する武装解除と捕虜拘束を続行する一方、新しい占領地区への兵力終結を完了しようとしていた。また、その後の8月27日と28日にも満州及び朝鮮での敵部隊の武装解除を進めた。8月26日、第一極東方面軍部隊が捕虜とした人数は1万1817人、8月27日には2762人、8月28日には1万3539人であった⁷³⁾。戦況報告によれば、8月9日から28日までの期間に、第一極東方面軍が捕虜とした人数は「23万963人で、この内兵隊は22万4487人、将校は6437人、将官は39人であった。民族別では日本人21万2317人、満州人9297人、朝鮮人6528人、中国人2800人」であった⁷⁴⁾。

8月30日及び31日、さらに9月1日の期間に、第一極東方面軍部隊は、関東軍軍人の武装解除と捕虜化を進める一方、「捕虜による労働大隊」⁷⁵⁾を組織する作業にとりかかった。8月30日「日本人将兵1万5257人が」、8月31日には7745人が「武装解除され、捕虜となった」⁷⁶⁾。8月31日第一極東方面軍第一赤旗軍は、掖河の南方18キロの地点で、投降して捕虜となることを拒否した日本人特攻部隊と戦闘を行なった。

戦況報告によれば、この戦闘で「265人が殲滅された」⁷⁷⁾。

第一極東方面軍部隊の戦利品も増える一方だった。8月9日から31日までの間に、部隊が獲得した戦利品は、ウマ6948頭、飛行機318機、戦車120台、車1417台、砲弾125万1000個であった⁷⁸⁾。

戦況報告によれば、9月2日、4日、5日第一極東方面軍部隊は、とりわけ「施設及び軍事捕虜収容所」の警備を行いつつ、日本軍人の捕虜拘束を続行、「投降を回避しようとする敵の部隊を捜索した」⁷⁹⁾。その意味で注目に値するのは、第一極東方面軍第25軍支配地域で8月30日日本の「破壊工作員」が鉄道ターミナル駅とその他三つの鉄道駅を爆破したという事実である。戦況報告によれば、8月30日及び30日の2日間に「47人の日本人破壊工作員が拘束された」。しかも、8月17日に第一極東方面軍が掌握した図們（トゥーメン）市で、「日本移民局」という名称の組織が摘発され、「私服の日本人300人」が逮捕された。逮捕者を家宅捜索した際、「図們市地雷敷設計画」が発見された⁸⁰⁾。

面白いことに、日本の降伏に関する文書の調印が行われた9月2日、牡丹江（ムータンチアン）から西に24kmの地点では、まだ戦闘が続いていた。すなわち、第一極東方面軍第一赤旗軍の管轄地帯で午前5時に「2000人からなる日本軍部隊が鉄道付近に現われ」、ヘイダオヘツアに向かっていてソ連の装甲列車と戦闘状態に入った。戦闘地域には、第一極東方面軍歩兵部隊が戦車とともに差し向けられ、第一極東方面軍本部戦況報告によれば、「敵は9月2日午後8時までに、散り散りになり、一部は殲滅された。戦場には100を超える日本人兵士の遺体が残された」⁸¹⁾。

8月5日付の戦況報告には、日本軍捕虜収容所に収容されていた者の解放について、初めての記述が現われた。内容は、第一極東方面軍第25軍部隊は8月25日、「吉林の南西180km西安市で」、「わが国の同盟国軍人及び文官16人を日本軍収容所」から解放した。解放された人々のうち、「フィリピン駐屯アメリカ軍司令官ウェインラント中将」、「マライ半島及びシンガポール要塞駐屯イギリス軍司令官ベルスベップ中将」、「オランダ領インド総督ジャイラ・ヴァン・ストッケンベルグ・スタルカウエル」の名も報告に記されている⁸²⁾。

さらに戦況報告を読み進むと、9月4日、第一極東方面軍部隊は将校25人、兵卒2062人を含む2627人を、9月5日には将官7人、将校26人、兵士1873人を含む1906人を武装解除、捕虜とした⁸³⁾。目を引くのは、9月5日「牡丹江及びエホ（原資料ではЗхо）の北東」地区で、第一極東方面軍第一赤旗軍により、「450人の日本人女性拘束された」との記述である。この種の記述はこれまでなかったもので、また第一極東方面軍本部があらかじめ「軍事捕虜」と「抑留者」⁸⁴⁾を別個の概念とし

て捉えていた事を示すものである。

9月6日付「戦況報告」によれば、1945年8月9日から9月5日までに「武装解除され、捕虜となったのは全部で26万1758人、内将官は50名、将校8109名、兵士25万3599人である。民族別では、日本人23万9362人、満州人9297人、朝鮮人6788人、中国人6311人」であった⁸⁵⁾。

結び

以上の資料を読むことにより、1945年8月9日から9月14日までの期間に捕虜となった日本軍人の数を時系列で示し、また可能な場合にはその民族構成も明らかにすることが出来た。

第一極東方面軍によって捕虜となった大量の日本軍人は、8月19日積極的な戦闘行為が終了して以降、抵抗を示すことなく捕虜となった。

捕虜となった者で、将官の地位にあった軍人50人のうち、日本側資料に基づいてデータを確認できたのは18人である⁸⁶⁾。1945年8月ソ連軍進攻開始の初期時点で、関東軍幹部クラスが74人であるとする日本側資料から判断すると、関東軍幹部クラスの少なくとも、およそ25%が、1945年9月5日までの期間に第一極東方面軍により捕虜となったと考えられる⁸⁷⁾。

日本軍人を捕虜とした目的をめぐっては、冒頭に述べたように説得力のある解釈がまだ存在していないが、本稿によっても明確な解明に十分な根拠を得るには至らなかった。いずれにせよ、ソ連指導部から発せられた1945年8月16日及び23日付指令に見られる食い違い（または方針の転換）については、第一極東方面軍を例にとると、8月16日の時点での捕虜の数と、8月23日時点の数とのあいだに驚くべき開きがある。8月19日から8月23日の前日、すなわち8月22日までの4日間に捕虜となった日本軍人の数は、実に14万5555人に達したのである。極東方面軍参謀本部の戦況報告の写しは、大半が直接スターリンのもとに送付されていたことを考えるならば、この数字が方針の変更に何らかの影響を及ぼした可能性は捨てきれない。

日本の研究者横手慎二氏は、8月19日以降ソ連指導部が日本軍人を大量に捕虜とする問題について至急決着させる必要に迫られていたことについて、検討の対象としないいくつかの仮説を批判しているが、本稿の著者も、横手氏の意見に同調したい⁸⁸⁾。

また本稿の著者は、信頼にたる事実資料を十分に蓄積検討することなく、最終的な解釈を打ち出そうとする試みには賛成しがたい。

付録1.

使用した資料（時系列）

1. 1945年6月28日。極東方面軍司令部宛最高総司令部命令第11112号。署名：
I.V.スターリン、P.P.アントーノフ
文書データ：Гл. Опер. Упр. (総作戦本部)，д.(件番号)106, т.(冊)2-55 г.,
л. л.(頁)238-240
2. 1945年6月28日。極東方面軍司令部宛最高総司令部命令第11113号。署名：
I.V.スターリン、P.P.アントーノフ
Гл. Опер. Упр. (総作戦本部)，д.106, т.2-55 г., л. л.241-243
3. 1945年6月28日。極東方面軍司令部宛最高総司令部命令第11114号。署名：
I.V.スターリン、P.P.アントーノフ
Гл. Опер. Упр. (総作戦本部)，д.106, т.2-55 г., л. л.247-250
4. 1945年8月2日。極東方面軍司令部宛最高総司令部命令第11121号。署名：
I.V.スターリン、P.P.アントーノフ
Архив ЦК КПСС (ソ連共産党中央委員会文書館)，д.No.2-45 г., л.161
5. 1945年8月7日。極東方面軍司令部宛最高総司令部命令第11122号。署名：
I.V.スターリン、P.P.アントーノフ
Архив ЦК КПСС (ソ連共産党中央委員会文書館)，д.No.2-45 г., л.162-163
6. 1945年8月7日。ザバイカル方面軍宛ソ連極東方面軍総司令官の命令第
080/NSH号。署名：ワシレフスキー、イワノフ
ЦАМО СССР (ソ連国防省中央文書館)，Ф.(ファイル番号)66, оп.(目録番
号)178499 сс, д.8, л.192, 193
7. 1945年8月7日。ザバイカル方面軍宛ソ連極東方面軍総司令官の命令第
081/NSH号。署名：ワシレフスキー、イワノフ
ЦАМО СССР (ソ連国防省中央文書館)，Ф.66, оп.178499 сс, д.8, л.189,
190
8. 1945年8月7日。ザバイカル方面軍宛ソ連極東方面軍総司令官の命令第
082/NSH号。署名：ワシレフスキー、イワノフ
ЦАМО СССР (ソ連国防省中央文書館)，Ф.66, оп.178499 сс, д.8, л.191
9. 1945年8月7日。ザバイカル方面軍宛ソ連極東方面軍総司令官の命令第
083/NSH号。署名：ワシレフスキー、イワノフ
ЦАМО СССР (ソ連国防省中央文書館)，Ф.66, оп.178499 сс, д.8, л.194

10. 1945年8月9日。アピール『わが祖国ソ連のために』。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフ元帥及び第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、K.グルシェヴォイ少将
Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.22154, д.2, л.39
11. 1945年8月9日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況総括報告第01/S号。写し送付：スターリン同志へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.264, оп.228296 сс, д.2, лл. (頁)11-13
12. 1945年8月10日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告。写し送付：スターリン同志へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.2, л л.21-22
13. 1945年8月14日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第06号。写し送付：赤軍総参謀本部長アントーノフ元帥へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.2, л л.53-54
14. 1945年8月14日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第08号。写し送付：スターリン同志へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.2, л л.73, 75
15. 1945年8月17日。ソ連極東方面軍総司令官宛直通電話による通知。写し送付：スターリン同志へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.2, л л.76

16. 1945年8月17日。ソ連極東方面軍司令部、第一極東方面軍、第二極東方面軍及びザバイカル方面軍司令官宛最高総司令部命令第11126号。署名： I.V.スターリン、P.P.アントーノフ
Архив ЦК КПСС (ソ連共産党中央委員会文書館), д.№.2-45 г., л.169
17. 1945年8月19日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第010号。写し送付：スターリン同志へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.2, л.87, 89
18. 1945年8月19日。日本軍第5軍降伏に関する報告。署名：シオシヴィリ第一赤旗軍諜報部長。
Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.4, л.47
19. 1945年8月19日。直通電話によるソ連邦大元帥スターリン同志宛通知。写し送付：スターリン同志へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.2, л.93
20. 1945年8月20日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第010/VS号。写し送付：スターリン同志へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.2, л.97, 99
21. 1945年8月21日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第011号。写し送付：スターリン同志へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフ・ソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.3,4
22. 1945年8月22日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第012号。写し送付：スタ

- ーリン大元帥へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
- Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.7-9
23. 1945年8月23日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第013号。写し送付：スターリン大元帥へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
- Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.11-13
24. 1945年8月24日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第014/VS号。写し送付：スターリン大元帥へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
- Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.15-17
25. 1945年8月25日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第015/VS号。写し送付：スターリン大元帥へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
- Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.19-20
26. 1945年8月26日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第016/VS号。写し送付：スターリン大元帥へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。
- Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.23-24
27. 1945年8月27日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第017/VS号。写し送付：スターリン大元帥へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中将。

Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.26-27, 29

28. 1945年8月28日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第018/V5号。写し送付：スターリン大元帥へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中將。

Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.30-32

29. 1945年8月29日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第019/V5号。写し送付：スターリン大元帥へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中將。

Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.35-36

30. 1945年8月31日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第021号。写し送付：赤軍総参謀長へ。署名：第一極東方面軍参謀長クルチコフ中將。

Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.39-40

31. 1945年9月1日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第022/V5号。写し送付：スターリン大元帥へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中將。

Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.41-42

32. 1945年9月2日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第023/V5号。写し送付：スターリン大元帥へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クルチコフ中將。

Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館), Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.43-44

33. 1945年9月3日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第024/V5号。写し送付：スターリン大元帥へ。署名：第一極東方面軍司令官K.メレツコフソ連邦元帥、第一極東方面軍事評議会メンバーT.シュトゥイコフ大将、同方面軍参謀長クル

チコフ中将。

Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館) , Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.45-46

34. 1945年9月5日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第026/VS号。写し送付：赤軍総参謀長へ。署名：第一極東方面軍参謀長クルチコフ中将、第一極東方面軍参謀本部作戦部長セミョーノフ少将。

Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館) , Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.48-50

35. 1945年9月6日。ソ連極東方面軍総司令官宛戦況報告第027/VS号。写し送付：赤軍総参謀長へ。署名：第一極東方面軍参謀長クルチコフ中将、第一極東方面軍参謀本部作戦部長セミョーノフ少将。

Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館) , Ф.234, оп.228296 сс, д.3, л.51-52

36. 1945年9月14日。ソ連極東方面軍総司令部参謀長宛報告。写し送付：赤軍総参謀長へ。署名：第一極東方面軍参謀長クルチコフ中将、第一極東方面軍参謀本部作戦部長セミョーノフ少将。

Архив МО СССР (ソ連国防省中央文書館) , Ф.234, оп.228296 сс, д.7, л.1.

付録2

第一極東方面軍が捕虜とした関東軍将官50人の内消息の判明している者の名簿⁹⁰⁾ (捕虜となった時系列により作成した)

1945年8月19日⁹¹⁾

1. 中将 清水規矩 第五軍司令官*
2. 少将 河越重貞 第五軍参謀長*
3. 中将 椎名正健 第五軍第124師団長*
4. 中将 コミゾ 第五軍第126師団長

おそらく、第五軍第126師団長野溝式彦中将のことであろうと思われる。しかし野溝の名前は8月31日拘束された捕虜名簿にも見える。

5. 中将 人見與一中将 第五軍第135師団長*

1945年8月21日

- 6. 中将 村上啓作 第三軍司令官*
- 7. 少将 池谷半次郎 第三軍参謀長*
- 8. 中将 古賀龍太郎 第三軍127師団長*
- 9. 中将 大田貞昌 第三軍79師団長*
- 10. 中将 水原義重 第三軍128師団長*

資料29によると、ミズハラ中将128師団長は8月29日に捕虜となったとの記録がある。

- 11. 少将 ヤノ 第五軍後方部隊長
- 12. 少将 ミナミ 第三軍砲兵隊長
- 13. 少将 コンドウ 第三軍衛生隊長
- 14. 少将 中村次喜蔵 第三軍112師団長*

資料22によると、「自殺した」となっている。

1945年8月22日

- 15. 少将 リ・ヴィン・ルン 第4満州軍管区司令官
- 16. 中将 上村幹男 第四軍司令官*
- 17. 少将 大野武城 第四軍参謀長*
- 18. 少将 アオキ・ケン 第四軍武器補給部隊
- 19. 少将 ナカムラ リュウイチ 軍名不詳 第102警備隊長

1945年8月24日

- 20. 少将 トミ・ナガ 軍名不詳 第139師団長

1945年8月26日

- 21. 少将 オカツ・ホトゥ 軍名不詳 第122師団長
- 22. 中将 マツアクハラ 軍名不詳 第112師団長

1945年8月27日

- 23. 少将 鬼武五一 独立混成第132旅団長

1945年8月28日

- 24. 少将 アキヤマ 軍名不詳 第一満州歩兵師団長⁹²⁾

- 25. 中将 水原 128師団長
- 26. 少将 ニタ 第三軍衛生部隊長
- 27. 中将 タケシタ ソウル軍管区司令官
- 28. 少将 マツザキ 軍管区不詳 軍訓練局長
- 29-33. 任務不明の少将セガロ、ナカワ、アリムラ、サグノ、カナオリ

1945年8月31日

- 34. 少将 ユキモラ・オノ 第一方面軍武器補給部隊長
- 35. 少将 板間訓一 第一方面軍参謀副長*
- 36. 少将 松村知勝 関東軍第一課高級参謀*
関東軍総参謀副長（作戦）を兼任
- 37. 中将 野溝式彦 第五軍第126師団長⁹³⁾ *

1945年9月5日

- 38. 少将 タクマ 羅南市警備隊長
- 39. 少将 川目太郎 第三十四軍参謀長*
- 40. 中将 藤田茂 第三十四軍第59師団長*
- 41. 少将 上坂勝 第三十四軍独立混成第53旅団長*
- 42. 少将 ナガシマ 軍名不詳 第54歩兵旅団長
- 43. 少将 シガラ 羅南師団軍管区軍事部長
- 44. 少将 タカカシ ハルピン憲兵局長

-
- 1. ここでは軍人に対する拘束は原則として「捕虜」を使うが、「抑留」という用語も一般に使用されているため、引用など必要な場合は、この言葉を使用するものとする。
 - 2. 横手慎二。“ソ連政府の日本人抑留者送還政策”、日ソ戦争と抑留の諸問題、スラブ研究センター報告シリーズ81号、スラブ研究センター、北海道大学、札幌 2002、p.21
 - 3. V.V.グルキン。「1941-1945 年における独ソ戦戦線における人的損失について」《Новая и новейшая история》誌、1992年3月号。
 - 4. 同上。
 - 5. 同上。
 - 6. 日ソ戦争と抑留の諸問題、p.1
 - 7. シンポジウムの主催者は、日本側が全抑協、ロシア側が「Vzaimoponimanie」（「相

- 互理解」]である。第9回シンポジウムについては、以下のインターネットURL（ロシア語）を参照されたい。<http://www.imemo.ru/conf>
8. 「日本人抑留者」に関するS.I.クズネツォフによる最近の著作の詳細な目録は、以下を参照されたい：《Россия глазами японских интернированных》（1945-1956 гг.）（「日本抑留者から見たロシア」）、ビュレテン《Окно в Японию》（「日本への窓」）、11, 2003.03.16,<http://russia-japan.nm.ru>；寺山恭介、“第二次大戦時のソ連における捕虜問題に関する最近の研究”、pp.38－56、日ソ戦争と戦後抑留諸問題
 9. 前出「日ソ戦争と戦後抑留諸問題」を参照されたい。
 10. 「ニェザヴィシマヤ・ガゼータ」2000年8月10日。
 11. 同上。
 12. O.D.バザーロフ、『ブリャートにおける収容所システムの確立』（1945-1948年）、「歴史講座」（連邦保安局主催）、1997年。
<http://www.fsb.ru/history/read/1997/bazarov>
 13. 寺山恭介、“第二次大戦時のソ連における捕虜問題に関する最近の研究”、pp.39－40、日ソ戦争と戦後抑留諸問題
 14. E.カタソーノフ、『シベリア捕虜：未解決の問題』、「ヤポーニヤ・セヴォードニャ」、2000年10月、<http://www.japantoday.ru>；寺山恭介、“第二次大戦時のソ連における捕虜問題に関する最近の研究”、p.49；V.P.ガリーツキー、『ソ連における敵軍捕虜（1941-1945年）』、「ヴァエンノ・イストリーチェスキー・ジュルナル」第9号、1990年、p.46
 15. 本稿で使用した資料の一覧は付録1。
 16. 注12を参照。
 17. クズネツォフS.I., カラセフS.V., “関東軍将官、満州国皇帝と政府高官のソ連への抑留（1945年）、前出「日ソ戦争と戦後抑留諸問題」13p.
 18. 同上。
 19. K.A.メレツコフ。回想録『国民に奉仕して』（На службе народу）。モスクワ、「ポリトイズダト」出版所、1968年、
URL：militera.lib.ru/memo/russian/meretskov/index.html
 20. 同上。
 21. URL：<http://www.warheroes.ru>を参照。
 22. 資料No.1
 23. 1 資料No.3
 24. 資料No.2
 25. 前出：K.A.メレツコフ。回想録『国民に奉仕して』（На службе народу）。
 26. 資料No.1
 27. 資料No.2
 28. 資料No.3
 29. 資料No.1-3
 30. 前出：K.A.メレツコフ。回想録『国民に奉仕して』（На службе народу）。例えば

1945年8月2日付ソ連極東総司令官宛総最高司令部指令では、ワシリエフスキーは「ワシーリエフ大将」となっている。資料No.4；メレツコフは日本人将官に対する尋問に関連して、「日本人は」、偽名の下にどんな人物が隠れているか、最後まで気づかなかったと回想している。前出：K.A.メレツコフ。回想録『国民に奉仕して』（На службе народу）。

31. 資料No.4
32. 資料No.5-9
33. 資料No.5
34. 資料No.7
35. 資料No.8
36. 資料No.6
37. 資料No.9
38. 資料No.10
39. 資料No.10
40. 資料No.10
41. 資料No.10
42. 資料No.11
43. 資料No.16
44. 前出：K.A.メレツコフ。回想録『国民に奉仕して』（На службе народу）。
45. 同上。
46. 同上。
47. 同上。
48. 資料No.14
49. 資料No.15
50. 資料No.17
51. 資料No.19
52. 資料No.17
53. 資料No.17
54. 資料No.18
55. 資料No.17；8月22日付け「戦況報告」は、「捕虜・第五軍司令官シミ中将」の尋問に触れ、「シミ中将は、1945年8月8日現在第五軍の兵力は6万5千」であり、「軍はハルピン方面軍を援護する任務にあったと証言した」。シミ中将によれば、「ロシア側の電光石火の攻撃」は、青天の霹靂であり、4万5000以上の損失を出すことになったという。資料No.22：シミ中将は、おそらく第五軍司令官清水規矩中将のことと推察される。
56. 資料No.19
57. 前出：K.A.メレツコフ。回想録『国民に奉仕して』（На службе народу）。
58. 同上。
59. 同上。
60. 資料No.20

61. 資料No.20
62. 資料No.20；ロシアのIMEMO（国際経済・国際関係研究所）が公式資料を引用したサイトによると、満州における7日間の戦闘で、「負傷した日本兵数十人が捕虜となり、また日本軍に強制的に徴集された韓国人、満州人、モンゴル人およそ8千人が、自発的にソ連側に投降してきた」という。URL：<http://www.imemo.ru/conf>
63. 関東軍の対ソ作戦並終戦概史、防衛研究所資料室、p.135－136
64. 資料No.20
65. 資料No.21
66. 資料No.22
67. 資料No.23
68. 資料No.23
69. 資料No.26
70. 資料No.24
71. 資料No.25
72. 資料No.26
73. 資料No.27-29
74. 資料No.29
75. 資料No.30-32
76. 資料No.30
77. 資料No.31
78. 資料No.31
79. 資料No.33-35
80. 資料No.15, 32
81. 資料.No.33
82. 資料No.34
83. 資料No.34-35
84. 資料No.35；「抑留者」という用語は、「戦闘を行なっているいずれかの側によりその軍の領土または、その軍が掌握する領土で拘束された敵対国の国民」を意味していた。V.P.ガリーツキー：『ソ連に於ける日本人捕虜収容所関連資料』、雑誌『Problemy Dal'nego Vostoka』、第6号、1990年、p.120.
85. 資料No.35
86. 付録2参照。
87. 戦史叢書、『関東軍』（2）、防衛庁防衛研究所編、朝雲出版所、1974年。付録第三を参照。ソ連政府が、軍高官をさまざまな目的、特に裁判などで利用することに大きな期待を抱いていたことは、周知の通りである。クズネツォフS.I., カラセフS.V., “関東軍将官、満州国皇帝と政府高官のソ連への抑留（1945年）”、p.19を参照。
88. 横手慎二 “ソ連政府の日本人抑留者送還政策”p.21
89. ソ連時代資料の閲覧の可能性が拡大したこと、また「冷戦」研究の見直しについては、White, Timothy J., “Cold War Historiography : New Evidence Behind Traditional Typographies”, International Social Science Review, Fall-Winter, 2000を参

照のこと。

90. 前出：戦史叢書、『関東軍』（2）、防衛庁防衛研究所編、朝雲出版所、1974年。付録第三で確認できた将官については、*を付した。
91. 最初に捕虜となった将官はおそらく、1945年8月17、18日に師団もろとも捕虜となった「第一満州歩兵師団長」と思われるが、氏名等は特定されていない。資料No.19。
92. 注91を参照。
93. 付録2中、1945年8月19日捕虜となった「コミズ中将」参照。